

浄土真宗本弘寺婦人会だより

平成24年9月

第34号

「前坊守を偲んで」

坊守 高島 美智枝

去る5月10日、私の母、そして「本弘寺のお母さん」でもあった前坊守が亡くなりました。母は初代坊守（お寺の奥さんのこと）として前住職を支えてこられました。

現在の墓地、境内は今でこそ整っておりますが、当時は草ぼうぼうで黙々と草むしりに精を出していらっしゃった現本弘寺の礎となりましたお二人のお姿が懐かしく思い出されます。

晩年は現住職を頼りきられ、仏法聴聞を喜ばれての日暮らしでした。床につかれてから1ヶ月でのご往生でしたが、その間本当に頭が下がる一言、一言。また、皆に対する最高の笑顔が私たち介護するものにとってどれほど励みになったことが計り知れません。

亡くなる前夜、母は住職や娘、孫たちに見守られながら、声にはなりませんでしたが皆と一緒に「恩徳讃」をうたわれ満足そうなお顔でした。そして5月10日11時28分、自坊で静かに眠るがごとくお浄土に還っていかれました。今年23回忌を迎えます前住職と蓮の台で再会しておられることでありましょう。俱会一処の世界があって本当に良かったと喜んで良いはずなのに、なぜかお念仏と共にただただ涙が溢れていました。しかし母が親鸞聖人様の

「別れ路のさのみなげくな法の友 またあう国のありと思えば」

また法然上人様がおっしゃられた

「別れゆく路ははるかにへだつれど 心は同じ華のうてなぞ」

のお言葉を日記に書き残してくださっていました。

私たちにどうか仏法を聞かせていただく日暮らしをして欲しいとの母の願いをしっかりと受け止めさせていただきながら、これから歩ませてくださいと思う今日この頃です。

大勢のお檀家の方々、そして有縁の方々に参詣を賜り、心より御礼申し上げます。合掌



「金子みすゞ ころのふるさとを訪ねて」

小林 絢子

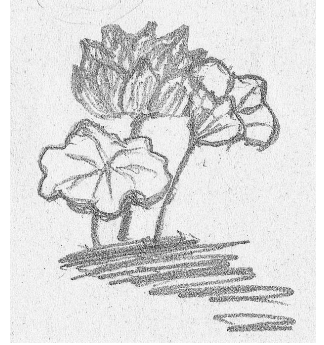
大正末期、鮮烈なデビューをされ、昭和5年26才で3才の我が子を遺しこの世を去った童謡詩人、金子みすゞさん。その作品は広く多くの人々に愛され深い感動を与えております。

この春、転勤で転居した娘家族の様子をうかがうため、主人と二人で徳山に行ってきました。6月28日同じ山口県の長門市仙崎、金子みすゞさんのふるさとを訪ねることが叶いました。徳山より約2時間ののんびりしたワンマン電車に揺られ着いた仙崎の町は、三方を海に囲まれ自然と人情に溢れた町でした。仙崎駅から北へ向かって海岸へ出る約1キロの道が「みすゞ通り」と名付けられています。昔の家並みが残っており、それぞれの家の軒先には手作りのみすゞの誌札が飾られている風景は感動ものでした。みすゞ通りの中程にみすゞ記念館がありました。平成15年、金子みすゞの家（金子文英堂）の跡に開館されたものです。みすゞさんは512編の作品を遺されています。その作品全ては、生かされていること、違うことのすばらしさ、見えないものの大切さ、人間中心のまなざしをひっくり返される深い優しさ、宇宙観、宗教観の深さに満ちたものばかりですね。

東日本大震災当時、テレビで「こだまでしょうか」の誌が連日ながされていました。人は1人では生きられない動物だからいろんな間柄で生かされている。いつもの住職の法話を思い出させてくれます。こだまし合う心が大切なんですね。「さびしいとき」という誌の中で最後、「私がさびしいときに、仏さまはさびしいの」と詠っています。仏さまは私がさびしいときは、仏さまも一緒にさびしくこだましてくれているのだなあと安心させてくれるんですね。私は縁あって婦人会の会員であること、仏法聴聞できる幸せをととても感じたこの旅に感謝です。合掌

「さびしいとき」

わたしがさびしいとき、よその人は知らないの。
わたしがさびしいとき、お友だちはわらうの。
わたしがさびしいとき、お母さんはやさしいの。
わたしがさびしいとき、ほとけさまはさびしいの。
金子みすゞ



「お念仏に出会って」

秦野別院坊守 高島 雅由

お寺に入ってもうすぐ1年が経とうとしていますが、住職と共にお念仏の道を歩ませていただいてからの私の人生は感動と感謝の日々です。恥ずかしながら、宗教とは加持祈祷や、亡くなった人を供養したり、お経という名の呪文で成仏させるためのものだと考えていました。

そんな私に転機が訪れたのは秦野の定例法話に誘っていただき、ご法話を聴聞させていただいたのが始まりでした。その当時は仕事や友人関係に悩み、精神的にも疲労が溜まっており、生きるのも辛い状況でした。しかし、初めて仏教に触れ、自分の命のすばらしさや、仏様の願いを知り、今までの自分の命は自分のものだと思って自我でしか生きてこなかったことや、仏様に背を向けて歩んでいたことに情けなく申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。その時に、宗教とは加持祈祷などの類いでは無く、生きる指針を与えてくれるのが宗教であるという事を知りました。

先日、霊苑にお子様を亡くされたお母様が来苑されました。その方は子供の死が母親にとってどんなに深い悲しみであるかという事を教えられた。ただ悲しくて、力が出なくて死ぬことも、生きることもできないとき、仏様に会えるような気がするとおっしゃいました。仏縁とは誠に厳しいと言うほかありませんが、その方は亡くなられたお子様のお陰で仏様の教えに出会うことができたのだと思います。浄土真宗では亡くなった方はすぐに仏様のお救いにより浄土に往生し仏様にさせていただくという教えですが、まさにこのお子様は手が合わされる存在＝仏様になられたという事を証明してくださっているなと感じました。

しかしながらその反面、霊苑でお客様に宗派は何宗ですかと尋ねると「無宗教」です。とお答えになる方が大勢いらっしゃいます。そのため納骨時に読経をいただかず自分たちだけで済ませ、あとの年忌法要も住職無しの偲ぶ会という名目でやられる方もいます。そのような光景を見ると、仏様の教えに出会う機会を逃され、故人をただの死んだ人にさせてしまっているのでは無いかと勝手に思ってしまう。それと同時に仏様に出会うという事がどれほど難しく、喜ばしいことなのかを学びました。数年前までの私なら「無宗教」ですと堂々と答える方となんら変わりありませんでしたので、今、お念仏の道を歩ませていただいて感謝しています。これから秦野の地でも阿弥陀様の御教えを多くの方にお味わいいただけるよう精進して参ります。合掌